

岩屋通信第十七号

今年も早いものでもう一月半月程が過ぎました。

昔、特に学生時代などは新年の新しくみずみずしい気持ち、今よりもっと長く持続していたような気がします。

しかし、齢重ねると共に、いわゆる元旦の計が三日坊主ではないですが、消えるのが早いような気がする。のは筆者だけではないようです。

逆に、五十路の坂を越えたら、年齢のことなど考えずにひたすら気持ちを高めながら自分の信じる道を究める、それを「人間力」と誰かが言っておりまして、そのような気が身体の中からいかに出せるかで、若さがいつまでも保てるか否かになっていくと思います。

先日から相次ぐ訃報に接しましたが、あの昭和三十九年開催の東京オリンピックの記録映画や犬神

家の一族など多数の映画を手がけてきた映画監督の市川崑氏が十二日に、また日本のプロゴルファーの草分けである中村寅吉氏が十一日に、どちらも同じ九十二歳での大往生だったようです。

両故人とも数年前までバリバリの現役だったとのこと、そう言えば映画とゴルフと、活躍した世界は両氏まったく異なるのですが、テレビで見るとその真剣で生き生きした眼差しがたいへん似ていました。

我々凡人も、合気道や仕事あるいは家庭を通して少しでも自分の生き方を確立させていきたいものです。

そのような訳で、今年もそれぞれが共通の道であるこの万生館合気道を通じて切磋琢磨しくことが大切でしょう。同時に回りの方々にも気配りを忘れてはなりません。

週に数回の稽古、また月一回熊本の本部まで行って砂泊先生の手を取らせていただき、直接指導を受けることができる幸せをあらためて感謝したいと思います。

冒頭で述べた元旦の計がやや消えかろうとする二月上旬、立春前の三日に北海道内では夕方四時から五時までの幼年部の指導稽古が終了した後、子ども達に豆を投げさせる毎年恒例の豆撒き大会を行いました。

稽古の時はあまり元気のなさそうな子どもでも、このような時は伸び伸びと思いついて両手にいっぱい持った小袋入りの豆（道場内の清掃を考えて袋入りを使用）を投げる姿はほほえましいものでした。

特に鬼の役目になって豆を投げられた若者の皆さん、どうもお疲れ様でした。

「幼年部の指導」

長崎北海道場の幼年部会員は現在約二十五名である。そしてその指導は、主に村里、古屋、吉田、大平の各氏、それに若杉、市川、田中親子、小島、阿比留、森脇、吉田牧子さんから各氏が応援してくれる体制で、土曜日と日曜日の十六時から十七時までの一時間実施しているのが現状である。

また、一般の大人の会員の中で早めに道場に足を運べる人はいっしょに稽古に加わり、楽しみながらとても指導体系は充実している。

一時間の稽古内容は、最初二十分は大人でもついでいくのがきついくらいの受身と体捌きをやり、残りは主に基本技をしている。

各指導者は、稽古内容や指導がより充実するよう

に連絡をとりあい、そしてコミュニケーションを図りながら、厳しい中にも優しさあふれる長崎北海道場としての特色を活かしながら行っている。

指導者全員が、子供達のために自分の時間を惜しんで道場に来て教えている姿は、他の道場と比べても決して遅れはないと思う。

やや手前味噌かもしれないが、指導者の数とその指導ぶりはかなりのものであるといっても過言ではない。

習い事で、それだけに没頭すると、それに隠れてしまいすべてがOKという錯覚を起こしてしまい、それによってモラルが低下している人を見かけることがある。

要するに、「結果さえよければいい。」という今の時代を物語っているのかも

しないが、そうした人が指導するとなると偏った指導しかできないのは当然である。

しかし、それぞれの指導者は年齢的には主に四十代後半から五十代であり、会社では中堅以上で仕事も忙しく、そして人生経験が豊富であり、また様々な

武道やスポーツの経験等も持ってきている人達ばかりであり、そうした人達は「世の中において何が大事で大切な」を知っており、そうした人が指導するということとは絶対に子供達に与える影響は学校教育と並んで将来必ず役立つ筈である。

このことは理屈としてもちろんと成り立つと思っし、また、客観的にみても十分理解できる部分である。

相手に対して発する「お願いします。ありがと」

ざいました。」という武道としては当たり前の言葉や最後の掃除。

そして、相手と呼吸を合わせる稽古内容。試合こそないが、相手のことを思いやるという精神が厳しい中にも合気道の場合にはふんだんに取り入れられている。

したがって、子供たちは自然とそうしたことが体を通して分かってくるものであり、子供の成長とともに自ずと備わってくるものである。

また、稽古内容も相手と呼吸をあわせるとともに、柔軟体操、前後の受身、体捌きなどを重点的に行っており、元気な子供には少々物足りない部分もあるが、しかし、こうした稽古法が絶対に悪いはずはない。

合気道は老若男女だれでもできる武道であり、当

然運動オンチな人でもできるものであり、そして稽古しているうちに他の武道やスポーツができる可能性を見出し自己としての成長を果たし得る場合がある。

また、逆に年配者で合気道を始める人は、今まで様々なスポーツをし、合気道ぐらいであれば続けていくこともできると思いい、入門する人もいる。また、人によつては「もっと早く合気道を始めればよかった。」という声も聞く。

最初は合気道から始まり、そして稽古しているうちに他のものを色々行つて、結局また合気道に戻ることにするのである。

したがってそうしたことを前提にしながら、北道場の指導者は指導しているからこそ子供達が伸び伸びし、そして、やめていく子供もいれば入ってくる

子も年に何回あつてもその指導ぶりに、変化がないのである。

一般的に、親が子供を習い事にやる場合は目的があるわけであり、「子供がより成長するように、そして健康になるように」という具合に様々な想いがあるが、色々な門をたたくのである。

子供自身は全然分からなくとも親から連れられてさせられることもある。そして、しているうちにだんだん子供自身が面白くなる子供もいれば、逆の場合もある。

子供の可能性を見つけ出そうと、今後も合気道の見学に来る人は途切れることはないだろう。

長崎北道場の子供の指導ぶりを客観的に見た場合、教え、動きに無理がないため非常に子供の成長には重要な要素が含まれ

ていることが明らかのように、北道場の門を叩く人は絶対に「これはいい武道である。」と感じるに違いない。

現代は人間のモラルが非常に低下し、結果さえよければそれでOKという状況下ではあるが、これから将来を担っていく子供達のために合気道を通して指導している長崎北道場の指導者の果たす使命はますます重要となつていくであろう。

(平成十七年五月濱田
*記述時期が約三年前のため、一部内容を現在の状況に合わせて加筆・修正しております)

梅が満開、と思つたら南の方からは桜の知らせがそろそろ、もう春はそこまです。二月二十四日(日)今年第一回目の道場内の小演武会に向けて頑張ります。